

現存在の存在意味と存在了解の意味

戸田 洋樹

Seinssinn des Daseins und der Sinn des Seinsverständnisses

Hiroki TODA

Meines Erachtens gibt es eine Veränderung der Ansicht zwischen “Sein und Zeit” und “Grundproblem der Phänomenologie” in 1927. In “Sein und Zeit” beabsichtigte Heidegger die Ausarbeitung der Seinsfrage und als Mittel zu ihr entwickelte er die existenziale Analytik des Daseins. Aber dieses Werk war unvollendet, so dass es nur die ‘Zeitlichkeit’ als Seinssinn des Daseins aufklären konnte. Nun bedeutete die Zeitlichkeit in diesem Werk nichts andere als die Seinsweise des Daseins und sie konnte nicht der Horizont des Seins oder des Seinsverständnisses sein.

In der Vorlesung “Grundproblem.” führte Heidegger den Begriff der ‘Transzendenz des Daseins’ ein, um die Zeitlichkeit mit dem Seinsverständnis zu beziehen. Es zeigt sich in dieser Vorlesung, dass die Zeitlichkeit die Bedingung oder der Grund der Transzendenz des Daseins und zugleich die ‘Temporalität’ als der Horizont des Seinsverständnisses ist.

Damit veränderte sich der Sinn der Zeitlichkeit selbst. In “Sein und Zeit” hatte ‘Zukunft’ den Vorrang in der Zeitlichkeit, weil dort es sich um die Seinsweise des Daseins und ‘eigentliches Selbst’ durch die ‘vorlaufende Entschlossenheit’ handelte. In der Vorlesung dagegen spielt ‘Gegenwart oder Gegenwärtigen’, im besonderen ‘Augenblick’ eine grosse Rolle. Denn das Seinsverständnis ist nicht eine blosse Seinsweise des Daseins zum eigentlichen Selbst durch vorlaufende Entschlossenheit, sondern das Verhältnis des Daseins zu Sein überhaupt im erhellenden Licht.

I

周知のように、ハイデッガーは『存在と時間』公刊の同年（1927）に「現象学の根本問題」という講義を行うが、この講義ははたして『存在と時間』と同一の内容を展開しようとしたものであろうか、それともこれを補完しようとしたものなのであろうか。「講義の概要」を見る限りでは、いずれでもあると答えることができるであろう。次のようになっているからである。

第一部「存在に関するいくつかの伝統的なテーゼについての現象学的・批判的議論」

第一章「カントのテーゼ：存在は実在的述語ではない」

第二章「中世存在論のアリストテレスに遡るテーゼ：存在者の存在には本質存在と現実

存在が属している」

第三章「近世存在論のテーゼ：存在の根本様式は自然（延長するもの）の存在と精神（思惟するもの）の存在である」

第四章「論理学のテーゼ：すべての存在者は、そのつどの存在様式にかかわりなく、くである」により語りかけられ語り合われる。コプラという存在」

第二部「存在一般の意味への基礎的存在論の問い。存在の根本構造と根本様式」

第一章「存在論的差異（存在と存在者の区別）の問題」

第二章「存在の根本分節（本質存在と現実存在）の問題」

第三章「存在の可能的変様と存在の多様性の統

一の問題」

第四章「存在の真理性格」

第三部「存在論の学問的方法と現象学の理念」

第一章「存在論の存在論的基礎と基礎的存在論としての現存在の分析論」

第二章「存在のアプリオリ性とアプリオリな認識の可能性と構造」

第三章「現象学的方法の基底部：還元、構成、破壊」

第四章「現象学的存在論と哲学の概念」

しかしながら、この講義も『存在と時間』と同様に未完結であり、第二部第一章で途切れてしまっているのである。その点から言って、「概要」（いわば講義予定）を見ただけでは単純には上のように答えることはできないのであるが、それでは内容に関してはどうなのであろうか。

実はわれわれが本稿で検討したいのは、『存在と時間』と「現象学の根本問題」との内容上の関係であって、両者を素直に読む限り、この点では両者の間には視点の微妙な食い違い、あるいは視点の変化を読みとることができ、ハイデッガーが「現象学の根本問題」（以下「根本問題」と略記）ですでに『存在と時間』の問題設定、より正確には、「現存在の実存論的分析論」を方途とする「存在問題の仕上げ」という問題設定を放棄しつつあったと考えるのである⁽¹⁾。

II

上記のように、「根本問題」は第二部第一章「存在論的差異の問題」で途切れているが、この章の冒頭でハイデッガーは、『存在と時間』における「現存在の実存論的分析論」に関連づけて、次のように述べている。

「実存論的分析論の成果」として、「現存在の存在機構は時間性 (Zeitlichkeit) に基づく」ということが示された。われわれはこの「時間性」がどういうものかを了解する必要があるが、そのために、「時間の通俗的な概念」から出発して、通常の時間理解や哲学上の問題がいかに「時間性」というものを前提しているかを学び知らなければならない。それによってわれわれは、「現存在の根源的な存在機構を洞察」し、「いやしくも存在了解 (Seinsverständnis) というものが現存在の実存に属している以上、この

存在了解も時間性に基づいている」ことを明らかにしなければならない。「存在了解の可能性の存在論的条件は時間性それ自身である。したがって、時間性から、われわれが存在というようなものを了解する基点 (von wo aus) が取り出されるのでなければならない」。

「時間性」が「存在了解」を可能にし、「存在とその分節や多様な様式の主題的解釈」すなわち「存在論」を可能にする。こうして、「時間性」に結びつく固有の問題、「存在時間性」 (Temporalität) の問題が生じる。「存在時間性」とは、「存在了解と存在論との可能性の条件として主題となる限り」での「時間性それ自身」のことであって、この術語により、「実存論的分析論における時間性が、われわれが存在を了解する起点 (von woher) としての地平 (Horizont) を提示する」ことが示唆されているのである (S. 323-324)。

以上のように述べてハイデッガーは、まずアリストテレスの時間概念をとりあげ、それを「通俗的、前学問的時間了解に対応する」もの (S. 362) と解釈し、「通俗的時間了解」が「根源的時間」すなわち「時間性」に基づくことを明らかにした (S. 362-388) あと、「……時間性の本質構造は、上で解明された意味での到来、既在、現前の包括的な脱自的・地平的統一 (die in sich geschlossene ekstatische-horizontale Einheit von Zukunft, Gewesenheit und Gegenwart) である」として、再度、「時間性が現存在の存在機構の可能性の条件である。しかし、いやしくも現存在が実存するものとして、自分自身ではない存在者と自分自身である存在者に関わる以上、現存在の存在機構には存在了解が属している。したがって、時間性は現存在に属する存在了解の可能性の条件でもあるのでなければならない」と繰り返して、次のように言う (S. 388) のである。「どうして、時間性が存在了解一般を可能にするのか。どうして、時間性としての時間が、存在論という学問、すなわち、学問的哲学の主題となるべき限りでの存在そのものの明確な了解作用 (das explizite Verstehen des Seins als solchen) にとつての地平であるのか。われわれは、前存在論的かつ存在論的存在了解の可能性の条件である限りでの時間性を存在時間性と名づける」、と。

さて、われわれは、この問いと文章が『存在と時

問』第83節の最後の、ある意味で唐突な問いと文章に酷似していることに着目しなければならない。そこでは次のように語られている。「<存在>というものは、実存する現存在に了解作用として属している存在了解のうちで開示されている。概念的に把握されてはいないが、しかし先行的な存在の開示性が、現存在をして存在者に、すなわち世界内部的に出会う存在者および実存する存在者としての自分自身に、実存する世界-内-存在として関わりうることを可能にする。いかにして、存在の開示的了解作用が、現存在にふさわしく総じて可能なのか。その問いは、存在を了解する現存在の根源的な存在機構に立ち返るなかで、答えを獲得しうるのか。現存在全体の実存論的-存在論的機構は時間性に基づいている。したがって、脱自的時間性そのもののある根源的な時熟の様式が、存在一般の脱自的企投を可能にするはずである。時間性のこのような時熟の様態はいかに解釈されうるのか。根源的時間から存在の意味への一つの道が通じているのか。時間そのものが存在の地平として明かとなるのか。

この『存在と時間』の最後の問いと文章がなぜ唐突なのかという問題⁽²⁾、そしてまた、『存在と時間』では「時間が存在の地平」であるとされているのに「根本問題」では「存在時間性」というものが「存在了解の地平」と結びつけられているのはなぜなのかという問題⁽³⁾、あるいは、そもそもハイデッガーがここでの問いに対して同一の答えを念頭にしていたのかという問題についてはひとまずおくとして、この二つの問いと文章に類似点を見出すのは容易である。「前存在論的存在了解」というのが「概念的に把握されてはいない、先行的な存在の開示性」に対応し、「存在そのものの明確な了解作用」ないし「存在論的存在了解」が「存在の開示的了解作用(erschließendes Verstehen)」に、あるいは、その具体的意味はともかく、「了解作用」というものが「企投」(Entwurf)と結びついている以上、「存在一般の脱自的企投」に対応しているからである。

ところで、われわれがここで敢えて両者の類似性を持ち出すのは、『存在と時間』がここで途切れてしまっているのに対して、「根本問題」ではさらに、第20節「時間性と存在時間性」、第21節「存在時間性と存在」、第22節「存在と存在者」と題される三つの節が続いていて、そこには上の問いへのなんらかの答

えが隠されていると考えるからである。つまり、それを明確にすることが、とりまなおさず、本稿におけるわれわれの課題に一つの解答を与えることに通じると考えるからである。

しかしながら、事情はそれほど単純ではない。ハイデッガーはこの三節で「存在論的差異」(die ontologische Differenz)と「現存」(Praesenz)の問題を除けば、『存在と時間』ですでに論じたことを繰り返しているにすぎないように見えるからである。しかも、「存在論的差異」であれ「現存」であれ、術語としては見当たらないけれども、考え方としては『存在と時間』ですでに示されていたものであると言えなくもないのである。だが、われわれはそうには考えない。一見すると、『存在と時間』で論じたことを繰り返しているようには見えるが、そこにわれわれは、ハイデッガーの視点の変化、ないし関心のずれを読みとることができると考えるのである。

III

第20節に、「世界-内-存在、超越と時間性。脱自的時間性の地平的諸図式」という項目がある。そこでハイデッガーはまず、「現存在の超越という概念に近づいて、現存在の超越と存在了解との連関を見、そこから存在了解の時間性そのものを問い返しうるようにしなければならない」(S. 418)、と問題を設定し、ほぼ次のように述べる。「世界-内-存在」としての「現存在」の「実存」のうちには、「世界すなわち有意義性の先行的了解」(ein vorgängiges Verständnis von Welt, Bedeutsamkeit) というものがあり、この「世界了解」とは結局、「現存在」の「他者との共存在の了解と事物存在者のもとでの存在可能や潜在の了解」を含んだ「自己了解」(Selbstverständnis)に他ならない。そして、「自己と世界は世界-内-存在という現存在の根本機構の統一のなかで一体化していて」、「世界-内-存在が他の現存在と世界内部的存在者の了解のための可能性の条件であり」、「世界内部的存在者の存在の了解の可能性、しかも、現存在自身の了解の可能性も世界-内-存在を根拠としてのみ可能である」(S. 420-423)、と。つまり、ハイデッガーによれば、「世界-内-存在」としての「現存在とは超越者(das Transzendente)」に他ならない。「世界」というものも「超越者」であるが、「本来的に超越者であるもの」(das eigentlich Trans-

zendenten) は「現存在」であって、「世界が超越者であるのは、それが世界-内-存在の構造に属するものとして・・・へと越え出ていくこと (das Hinüberschreiten zu・・・) そのものをなすからである」(S. 425)。

「現存在の超越、超-出 (Über-hinaus) は、事物存在者であれ、他者であれ、存在者としての自分自身であれ、存在者へと現存在が関わることを可能にする」のであって、「われわれが現存在とよぶ存在者は、そのものとして・・・に開いて (offen für・・・) いる。この開性 (Offenheit) が現存在の存在に属する。現存在はみずからの現であり、この現のうちで現存在が自分に対して現に存在し、他者が共に現に存在し、この現へと向かって道具的存在者と事物存在者が出会うのである」(S. 426)。しかも、この「超越」は「自己へ向かうこと」(das Auf-sich-zu) と「自己-から出ること」(das Von-sich-aus) の二つからなる「自己性」(Selbstheit) の根拠でもあり、この「自己性」により、「現存在は、みずから固有に存在したり自己を失ったりするという種々の可能性」を生き、また、「汝-自己」(Dir-Selbst) と「私-自己」(Ich-selbst) という意味で、他者との共同存在でもあることができるのである (S. 425-426)。

いずれにしても、ハイデッガーによれば、「現存在」は「超越者」であるがゆえに、「自己へ関わる存在」(Zu-sich-sein) であり、「他者との共同存在」(Mitsein mit Anderen) であり、「道具的存在者と事物的存在者のもとでの存在 (Sein-bei Zuhandenem und Vorhandenem) なのであって、この「超越」が、「現存在」の「存在了解」を可能にしているわけであるが、それではこの「現存在の超越」それ自身は何に基づくのか。いうまでもなく、ハイデッガーの持ち出すのは「時間性」である。「時間の脱自的性格が現存在の特殊な超出性格、超越を可能にし、それとともに世界をも可能にする」(S. 428)。しかし、「時間性の脱自態 (die Ekstasen)」、つまり、「到来」(Zukunft)、「既在」(Gewesenheit)、「現前」(Gegenwart) は、「・・・への脱出」(Entrückung zu・・・) として、その「行く先」(Wohin) をもっている。この「行く先」が、ハイデッガーによれば、「脱自の地平的図式」(das horizontale Schema der Ekstase) なのであり、結局のところ、「超越というものが存在了解を可能にし、超越は時間性の脱自的

-地平的機構に基づいている以上、時間性の脱自的-地平的機構が存在了解の可能性の条件である」(S. 429) ことになる。

それでは、「時間性の脱自的-地平的機構」はどのようにして「存在了解の可能性の条件」でありうるのか。周知のように、ここ「根本問題」でハイデッガーは、この問題、つまり「存在時間性」の問題については、視点を限定して「われわれはまずさしあたり目の前に存在するものの存在、道具的存在性の存在時間的解釈を試みて、範例的に、超越という観点で、存在了解が存在時間的にいかにして可能かを示そう」とのべ、「現前化の脱自態の地平的図式」としていわゆる「現存」(Praesenz) という概念を論じるわけなのであるが、ひとまず、それを見よう。

『存在と時間』でも示されていたように、「道具的存在者」に関わる「時間性の脱自態」とは「現前」(Gegenwart) ないし「現前化」(Gegenwärtigen) であるが、この「現前」と「現存」との連関に関してハイデッガーは次のように述べる。「現前という脱自態はそのものとして、ある特定の〈自己超出〉(über sich hinaus) の、超越の、現存への企投の可能性の条件であって、「〈自己超出〉そのものの行く先 (Wohin) をそもそも規定しているのは、地平としての現存である。現前は自分自身うちで脱自的に現存へとみずからを企投するのである」(S. 435)。すなわち、ハイデッガーによれば、「われわれが存在を了解するのは時間性の脱自態の根源的地平的図式に基づいてなのである」(S. 436)が、「道具的存在者の存在」は「現存に基づいて」(aus Praesenz)、言い換えれば、「現存として」(als Praesenz) (S. 438) 了解されるのである。そして、「存在時間性」(Temporalität) というものが「存在了解の可能性の条件」である限りでの「時間性」(Zeitlichkeit) を意味するとすれば、「道具的存在者の存在」を「現存」として了解することを可能にする、言い換えれば、「現存」へと企投する「現前」というものによって、「存在時間性」の問題の一つが暴かれたことにもなる。

IV

「根本問題」では、さらに「存在論的差異」の問題が取り上げられるのであるが、その問題はひとまずおき、これまで述べてきた「根本問題」における

ハイデッガーの考え方のうちに読み取れるものを、本稿の課題に関わる限りで検討してみることにする。

まず、ハイデッガーは「存在了解」とその「時間性」を明らかにするとして、「現存在の超越」というものを取り上げるのであるが、『存在と時間』で具体的に「超越」の問題に言及しているのは、第69節のC、「世界の超越の時間的問題」(S. 481以下)においてである。この節の導入部で(S. 465)、ハイデッガーは次のように問う。「いかなる仕方であらうか、世界と世界が、いかなる意味で世界があるのか。何をそしてどのようにして世界は超越するのか。独立した世界内部的存在者が超越する世界と連関するのは、どのようにしてか」と。ここでわれわれが注目したいのは、「超越」ということでハイデッガーの念頭にしているのが、さしあたりは「現存在の超越」のことではなくて、「世界の超越」のことであり、「世界の超越」というのは、「世界内部的存在者」からの、つまり、第一的には「道具的存在者」からの「世界」の「超越」を意味するということである。もちろん、この節のCで示されるように、ここでの課題のひとつは、「現存在の存在の意味」である「時間性」の「脱自的統一」から「世界の超越」の問題を解明することであり、その解明により、いわば「世界の超越」が「現存在の超越」に基づくということが示されれば、この節においても本来念頭にされているのは、「現存在の超越」のことだと言いうるかも知れない。実際、この節のCで、ハイデッガーはこう述べている。「現存在が時熟する(sich zeitigen) 限りにおいて、世界も存在する。・・・中略・・・世界は事物的に存在するのでも、道具的に存在するのでもなく、時間性のうちで時熟するのである。世界は脱自態の外化(Ausser sich)とともに<現に><存在する>。現存在が実存するのでなければ、世界は<現>でない。・・・中略・・・脱自的時間性の地平的統一に基づきつつ、世界は超越的である。世界のほうから世界内部的存在者が出会うためには、世界がすでに脱自的に開示されているのでなければならない」(S. 483)。このハイデッガーの叙述を見る限り、確かに、「現存在」の「時間性の脱自的統一」のもつ「地平的」機構が「世界の超越」を可能にするという意味では、「現存在の超越」が「世界の超越」を成立させていると言いうるであろう。だが、われわれが注目しな

ければならないと言うのは、そのようなことではない。「根本問題」においてハイデッガーは、「現存在の超越」を成立させるものとして、「時間性の脱自的-地平的機構」というものをあげているということ、それに対して『存在と時間』では、「時間性の脱自的-地平的機構」は「世界の超越」を成立させるものとして考えられているということである。「根本問題」で考えられている「現存在の超越」と『存在と時間』で述べられている「世界の超越」とが内容的に同一のものでないことは、これまでのわれわれの叙述からして明かであろう。

それでは、「根本問題」で語られている「現存在の超越」というのは、『存在と時間』におけるどのような「実存カテゴリー」にあたるのか。

ここでわれわれは「現存在の超越」というものが『存在と時間』における「了解作用」の概念と密接に連関している、あるいはむしろ、ある観点においては、同一のものであることを指摘しておかなければならない。

『存在と時間』第31節「了解作用としての現-存在」では、まず次のように述べられる。「目的であるもの(Worumwillen)において、実存する世界-内-存在がそのものとして開示されていて、この開示性が了解作用とよばれた。目的であるものの了解作用のうちで、それに基づいている有意義性が共に開示されている。了解作用の開示性は、目的であるものと有意義性とのそれとして、等根源的にまったき世界-内-存在に関わる。・・・中略・・・目的であるものと有意義性が現存在のうちで開示されているということは、現存在が、世界-内-存在としてみずから自身が問題である存在者である、ということを意味する」(S. 190)と。そして、「了解作用」は「企投」(Entwurf)という「実存論的構造」をもっている(S. 193)が、「了解作用は、その企投性格からして、実存論的に、われわれが現存在の視(Sicht)とよぶものをなしている。・・・中略・・・第一的にまた全体として実存に関わる視を、われわれは透視性(Durchsichtigkeit)とよぶ。・・・中略・・・実存する存在者がみずからを視るのは、それが等根源的に、みずからの実存の構成的契機としての世界のもとでの自分の存在と他者との共同存在とのうちで、透視的となっている限りにおいてである」(S. 194 f.)、と述べられ、さらにこう言われているのであ

る。「了解作用は第一次的には世界の開示性のうちに
おき入れられることができる、言い換えれば、現存
在はまずさしあたりたいていは、みずからの世界の
ほうから自分を了解することができる。それとも了
解作用は第一次的に、自分を目的であるものへと企
投する、言い換えれば、現存在は現存在自身として
実存する」(S. 194)、と。

このように、「現存在の超越」といわれているもの
が、内容的に見て、『存在と時間』の「了解作用」の
ことであることがわかるわけであるが、しかし、ハ
イデッガーはなぜ「根本問題」で「現存在の超越」
という概念をことさらに用いて、それを敢えて「存在
了解」と結び付けて、「時間性の脱自的-地平的機構」
に基づくものとしたのであろうか。なぜここでも「了
解作用」という概念を用いないのであろうか。すで
に『存在と時間』でハイデッガーは、「現存在の存在
が、有意義性(世界)へと被投されていると同時に
目的であるものへと被投されていることのなかに、
存在一般の開示性が存する。諸可能性への企投作用
のうちですでに、存在了解が先取りされている。存
在は企投において了解されている・・・略・・・」(S.
196)、と主張しているにも拘らず。

V

われわれは『存在と時間』においては「了解作用」
という概念に二つの意味が与えられていることに注
目しなければならない。一つは、いま上で述べた「現
存在」の「視」を成立させる「現」の「開示性」全
体のことを指しているのに対して、もう一つは、「情
状性」(Befindlichkeit)、「語り」(Rede)と並ぶ「開
示性」の一契機を指しているにすぎないということ
である。実は、『存在と時間』の叙述の展開ととも
に、「了解作用」という概念は主に後者の意味に限定
され、この概念は、「情状性」が「現存在」の「被投
性」(Geworfenheit)と結び付けられる一方で、もっ
ぱら「現存在」の「企投」(Entwurf)に結び付けら
れて、「頹落」(Verfallen)を加えて、「気遣い」
(Sorge)という「現存在」の「存在」を構成する一
契機となっていくのである。すなわち、「気遣い」と
いうのは「みずからに先立って」(Sich-vorweg)と
「世界のうちにすでに存在する」(schon-sein-in-
der-Welt)と「世界内部的に出会う存在者のもとで
の存在」(Sein-bei innerweltlich begehendem

Seienden)の三つの契機をもっているが、「了解作
用」は、「企投」として、単に「みずからに先立って」
という側面に結び付けられることになっていくので
ある。それだけではない。この「気遣い」という「現
存在の存在」の「意味」とは、結局のところ「時間
性」であることが明かとなるわけであるが、「了解作
用」、そして「企投」という概念に結び付いている「み
ずからに先立って」という側面は、「既在」
(Gewesenheit)、「現前」(Gegenwart)と並ぶ「時
間性」の単なる一契機、すなわち「到来」(Zukunft)
によって意味づけられているにすぎないのである。

「了解作用」という概念がこのような狭い意味に
限定されてしまうとすれば、「存在一般の意味」の解
明であれ、「存在問題の仕上げ」であれ、あるいは「存
在了解」の意味の解明であれ、「了解作用」という概
念からこれらの問題を解決する手がかりを得ること
はできず、それゆえにこそ、「根本問題」では「現存
在の超越」という概念を新たに用いて、「存在了解」
の意味を解明する手がかりとしたと言わざるをえな
いのである。

VI

しかし、それだけであらうか。第一に、「根本問題」
でハイデッガーが「了解作用」という概念の代わり
に、「現存在の超越」という概念をことさらに使用し
て、それを「存在了解」の意味の解明の手がかりに
しようとした理由はそれだけであらうか。さらにま
た、考えてみると、『存在と時間』では「時間性」を
みずからの意味とする「現存在の存在」とは「気遣
い」のことであつた。「根本問題」では、「時間性」
に基づいているのが「現存在の超越」とされている。
とすれば、第二に、「根本問題」における「現存在の
超越」とは、『存在と時間』の「気遣い」のことを指
しているのではないのか。「根本問題」でハイデッ
ガーが「気遣い」という概念をそのまま用いないのは
なぜなのだろうか。実は、この二つの事柄は密接に
連関していて、われわれはここにわれわれが冒頭で
あげた本稿の課題の一つの解答を見ることができ
ると考えるのである。まず、後者の問題から検討しよ
う。

「気遣い」というのは、上述のように、「世界内部
的存在者のもとでの存在として、みずからに先立っ
て、世界の内にすでに存在する」という構造をもつ

ていた。この構造は、通俗的には、「みずからはこの世界に存在することの根拠たりえずにこの世界に投げ出され(被投)、道具的存在者を使用したり他人のことをあれこれと気にしながら(頹落)、自分自身の成り行きをみずから選択して(企投)生きている」という、「現存在の在り方」と表現しうが、しかし、もしそうであれば、これはあくまでも「現存在の在り方」にすぎず、それ以上のものでも以下のものでもないのではないだろうか。言い換えれば、このような「現存在の在り方」をいかに明確にしたところで、「存在一般の意味」の解明であれ、「存在問題の仕上げ」であれ、「存在了解」の「意味」の解明であれ、これらについてなんらの決定も下せないのではないだろうか。「現存在の存在了解」というものに限定して言えば、「現存在がどのような存在の仕方をしているか」ということと、「現存在がどのようにして存在を了解しているか、あるいはどのような存在了解をもっているか」ということとは、直接的には無関係であると言わざるをえないであろう。それゆえにこそハイデッガーは「根本問題」において「存在了解」の問題を論じるにあたり、「現存在の超越」という概念を用いて、『存在と時間』の「気遣い」という概念を用いなかった、すなわち、「現存在の在り方」と「現存在の存在了解」とを連関させるために、「現存在の超越」という概念を新たに導入したとみなさざるをえないのである。

だが、ハイデッガーは『存在と時間』ですでに、「気遣い」としての「現存在の存在」の意味を解明するにあたり、次のように述べている。「求められているのは、存在一般の意味への問いに対する答えであり、またそれに先立って、すべての存在論のこの根本問題を徹底的に仕上げる可能性である。しかし、存在一般といったものがさしあたり了解される地平の解放は、存在了解一般の可能性の解明と等しいのであって、この存在了解自身は、われわれが現存在と呼んでいる存在者の機構に属している。だが、存在了解というものが現存在の本質的な存在契機として徹底的に解明されるのは、存在了解がその存在に属している存在者が、それ自身に即して、その存在に関して根源的に解釈されるときにだけである」

(S. 307-308)、と。この文章を見る限り、ハイデッガー自身は、『存在と時間』においても、「存在了解」というものは「現存在の存在」の「本質的な契

機」として「現存在の存在」に属しているゆえに、「現存在の存在」が「根源的に解釈され」れば、「存在了解一般の可能性」が解明されるとともに、「存在了解の地平」も開かれると考えていると言わざるをえないであろう。しかし、はたしてそうであろうか。われわれが主張したいことは、ハイデッガーの『存在と時間』における目論見のことではなく、そこで展開された実際の内容のことについてである。「現存在の存在の根源的な解釈」の成果、すなわち、「現存在の存在の意味」として解釈された「時間性」について検討しよう。

『存在と時間』では、「現存在の本来的全体的性」を表す「先駆的決意性」(die vorlaufende Entschlossenheit)という概念を通じて、「到来」、「既在」、「現前ないし現前化」の「統一的現象」としての「時間性」が「本来的な気遣いの意味」として暴かれる。まず、「到来」という契機については、次のように言われている。「……先駆的決意性とは、最も固有な際立った存在可能へと関わる存在 (das Sein zum eigensten ausgezeichneten Seinkönnen) のことである。このようなことが可能であるのは、現存在が総じてそのもつとも固有の可能性のなかでみずからへと到来することができ、このみずからをみずからへと到来させるなかで、可能性を可能性としてももちこたえる、つまり実存するというようにしてのみである。際立った可能性をもちこたえつつ、この可能性のなかでみずからをみずからに到来させることが、到来という根源的な現象である」(S. 430)。「到来」という現象は、このように、「現存在」がみずからの「可能性」のほうから自分を自分として、いわば了解することであり、「現存在」が「死へと関わる存在」(das Sein zum Tode)であることは、「到来」という「時間性」のゆえであり、さらにまた、「気遣い」の「みずからに先立って」いるという契機もこの「到来」に基づく、とハイデッガーは言うのである。だが、この「到来」という概念は、「存在了解一般」とどのように結び付くのだろうか。「到来」というのは、いかに「根源的」、「本来的」、「全体的」であろうとも、単に「現存在の在り方」のことにすぎないのではないだろうか。

次に、「既在」についてはどうであろうか。ハイデッガーはこう述べている。「先駆的決意性は現存在をその本質的な責めある存在 (das Schuldigsein) にお

いて了解する。この了解作用は、責めある存在を実
現しつつ引き受けること、非力さの被投された根拠
として存在することを意味する。しかし、被投性を
引き受けることは、現存在がそのつどすでに在った
とおりのままで本来的に存在することを意味する。
だが、被投性を引き受けることが可能なのは、到来
的な現存在がみずからの最も固有なくそのつどす
で在ったとおりのままである、すなわちみずから
の〈既在〉でありうる、というようにしてのみであ
る。現存在は、総じて私は既在しつつ在るとい
うかたちで存在する限りにおいてのみ、みずから
が立ち帰りもどる (zurück-kommen) というよ
うに、到来的にみずから自身へと到ることができ
るのである。本来的に到来的に、現存在は本来
的に既在しつつ在る」(S. 431)、と。やはり、「既
在」も、本来「到来から発する (entspringen)
」ものとして、「到来」と不可分な「現存在の在
り方」のことであるが、「現前」については、さ
しあたり、次のように語られる。「先駆的決意
性は、現のそのときどきの状況を、実存が行為
しつつ現実的に環境世界的な道具的存在者を配
視的に配慮するというかたちで、開示する。状
況での道具的存在者のもとで決意しつつ存在す
ること、すなわち、環境世界的に現存するもの
を行為しつつ出合わせることは、この存在者を
現前化することにおいてのみ可能である。現前
化という意味での現前としてのみ、決意性はそ
れであるところのものでありうる……。『現前』
に関しても、あくまでも「現存在の決意性」と
いう「現存在」自身の在り方が問題なのであ
る。

このように見てくると、『存在と時間』では「
気遣い」であれ、その「意味」としての「時間
性」であれ、基本的には、「現存在」の在り方
という視点で捉えられていて、これらの概念は
「存在了解」の問題とは直接には結び付くも
のではありえなかった。それゆえにこそ、『根
本問題』では「現存在の超越」という概念を
新たに導入して、「存在了解」の問題と「時間
性」の問題、すなわち「存在時間性」の問題
に何らかの示唆を与えようとせざるをえな
かったと考えられるのである。『存在と時間』
は、いわば、「現存在」の「実存論的分析」に
執着するあまり、「存在一般の意味」の解明、
あるいは「存在問題の仕上げ」、あるいは「
存在了解」の意味の解明といった問題を忘
却してしまった、あるいは、これらの問題から知

らず知らずのうちに離れていったと言えるか
もしれない。「現象学の根本問題」は、その軌
道修正として講義されたものであるという推測
も成り立つであろうが、それはあくとして、そ
れでは、具体的には『存在と時間』と「根本
問題」との視点の変化というのは、どこに読
み取れるのだろうか。「根本問題」において
は、『存在と時間』では表面に出ていなかった
「現存在の超越」、「存在論的差異」、「現
存」といった概念が浮土してくるが、そこに
隠されている視点の変化のことである。その
一つを指摘することによって本稿の暫定的結
論に代えることにする。

VII

上述のように、『存在と時間』では専ら「
現存在」の在り方に着目され、「気遣い」であ
れ、「時間性」であれ「存在了解」という観
点から分析されてはいなかった。それはなぜ
であろうか。われわれは、『存在と時間』の
本来の目的というのが「存在問題の仕上げ」
であり、そのための「存在の地平」としての
「時間」の解明であるとされていたにも拘
らず、その方途としての「現存在」の「実
存論的分析論」であるものが、いわば自立性
を得て一人歩きをしてみたところ、その理
由がある、と考える。具体的に言えば、「存
在問題」ではなく、「実存の理念」(S. 309)
が『存在と時間』を支配した結果、『存在
と時間』は単なる「実存論的分析論」に終
わってしまい、そこでの最大の関心は、「先
駆的決意性」に目覚めた「現存在」の「本
来的な自己」(das eigentliche Selbst)へ
の決断となったのである。「存在問題」に
結び付くはずの「時間性」も、それにより、
「本来的な生き方」へ向かっての「実存」の
決意という観点で語られる。『存在と時間』
「時間性と歴史性」の章における次の文章
はあまりにも有名である。「本質的にみず
からの存在において到来的 (zukünftig) であ
り、したがって、みずからの死に向かって自
由でありながら、死につきあたって打ち砕
け、みずからの現実的な現 (faktisches Da)
へと投げ返される存在者のみが、すなわち、
到来的なものとしてこれと等根源的に既
在しつつ (gewesend) 在る存在者のみが、
相続された可能性をみずから自身に伝承し
つつみずから固有の被投性を引き受けて、
みずからの時間のために瞬視的に (augen
blicklich) 存在することができるのである」
(S. 509)。

さて、われわれはここで「時間性」という概念に視点を限定しよう。このような「実存の理念」の支配下にある「実存論的分析論」にとっては、「時間性」に関して最も重要な契機は、いうまでもなく、「到来」(Zukunft)に求められると言わざるをえないであろう。「現存在は、それが到来的である限りにおいてのみ本来的に既在しつつありうる。既在はある種の仕方であらうから発するのである」(S. 431)。「根源的、本来的時間性の第一次的現象は到来である」(S. 436)、といった『存在と時間』の文章からもそれは明らかである。それに対して、「現前」という契機はそれほど優位性をもたされることはない、というよりも、「到来」や「既在」の下位に置かれることにならざるをえない。なぜなら、「現前」は「現存在」の「世界内部的存在者のもとでの存在」を可能にする契機であり、「現存在」は、日常的平均的には、「現前」のいわば「非本来的」な姿である「現前化」(Gegenwärtigen)の支配下で「頹落」しているのであって「現前」の「本来的」な姿とされる「瞬視」(Augenblick)も、「到来」と「既在」によってのみ「喚びさま」(wecken)される(Vgl. S. 436)ものにすぎないからである。

このように、『存在と時間』では、「時間性」の概念に関して「到来の優位」(der Vorrang der Zukunft) (S. 436)が主張されるのであるが、「根本問題」では、そうではないのである。むしろ、「現存在」の「世界」への関わりという観点での「現前」あるいは「瞬視」のほうにハイデッガーの関心が移っていると言わざるをえないのである。このことは、すでに述べたように、「根本問題」では「現存在の超越」という概念が前面に出ているということ、「脱自態の地平的図式」としては「現存」という「現前」ないし「現前化」のそれについてのみあげて、「到来」や「既在」の「地平的図式」についてはなんらふれることがないということなどからも明らかであるが、ここで特にとりあげたいのは、「瞬視」についてである。ハイデッガーは、「瞬視」が「決意性」から発して、「行動の状況」をなしているものへの「視」(Blick)として、「世界-内-存在」としての「現存在」に、みずからの「世界」を「視」のなかに持たせて保持させるものであると語ったあと、次のように述べるのである。「ところが、現存在は世界-内-存在として同時に他の現存在との共同存在でもあるゆえ、本来的

な実存する相互共同存在も、第一次的には、単独者の決意性に基づいて規定されなければならない。決意した単独化に基づいてはじめて、また、それにおいてはじめて、現存在は汝(Du)に対して自由で開かれているのである。……中略……。上述のことから一つのことが判然となったはずである。すなわち、瞬視とは現存在の根源的、本来的時間性に属して、現前化としての現前の第一次的、本来的様態であることである」(S. 408)、と。ここでハイデッガーは、「瞬視」の意味を変えているわけでは必ずしもないが、この概念を「現存在の超越」に結び付けて、「世界」、「世界内部的存在者」、「他の現存在」の「存在了解」の問題に関連させようとしていると考えられるのである。ハイデッガーが次の節において「地平的図式」として「現存」の問題のみを論じるのも、この「瞬視」概念の重視に関連していると言えるであろう⁽⁴⁾。

結局のところ、「根本問題」の関心は、未完の『存在と時間』のような「現存在の存在」としての「気遣い」やその「意味」としての「時間性」ではなく、「存在了解」のための「現存在の超越」やその「意味」としての「時間性」に向けられているのであって、ここで「存在論的差異」の問題が前面に出てきたのも、「現存在」の「存在」との関わり、「存在」に対する「前存在論的了解」と「存在論的了解」との区別にハイデッガーの視点が移ってきたからである、と思われるのである。「根本問題」第20節は、プラトンに言及しながら、次のような示唆を与えている。「存在者の認識」であれ、「存在を了解すること」であれ、「照らし出す光」(das erhellende Licht)のなかに立つことである。「存在を了解することは、総じて明かりを与え、照らし出す地平のなかをすでに動いている」(S. 402)。「見ることはすべて、光を必要とするが、さしあたりは、光が見られることはない。現存在が光のなかへ入り込むということは、真理一般の了解を獲得することを意味する」(S. 403)⁽⁵⁾。

- * 引用は『存在と時間』、『現象学の根本問題』のいずれも、Martin Heidegger: Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann からである。

〈注〉

- (1)本稿は直接には『存在の時間』の未完問題についてはふれないが、間接的にはその問題にも関係する。なお、未完問題については、拙稿：「『存在と時間』の未完問題を巡って」（『横浜市立大学論叢』、第39巻、人文科学系列、第2、3合併号）を参照されたい。
- (2)唐突なのは、『存在と時間』はこの文章の前までは「通俗的時間概念」を論じ、それとの関連から「ヘーゲルの時間概念」の批判をしていたにすぎず、さらにまた、それ以前には、「時間性と歴史性」を論じて、重要なことは「現存在」の「本来性」への目覚めであるかのようなことを語り（例えば、本稿で後に引用する509頁の文章が代表的である）、次いでデイルタイとヨークの歴史観にふれていたのが、突然このように言われているからである。
- (3)ハイデッガーが『存在の時間』の目的として掲げている用語とその意味も必ずしも明確ではない。その目的が「存在の意味の解明」なのか「存在の問題の仕上げ」なのか「存在論の基礎付け」なのか、それとも「存在了解の意味の解明」なのか。このすべてであるとすれば、これらの問題はどうか関連するのか。
- (4)ハイデッガーの関心は、すでに「現存在」が「存在」とどのように関わるかという問題に移っていると考えられる。「現存」や「存在論的差異」を表だって取り上げるのも、そのゆえであると思われる。
- (5)この後、「光」については論じられてはいないが、ここに「現存在」と「存在の開け (Offenheit)」という1930年代の「真理論」の先駆けを見ることはできないだろうか。